

農業技術センターニュース

目次			
トマトホモプシス茎枯病の発病特性	… 1	ナスおよびトウガラシ遺伝資源の 青枯病抵抗性検定	… 4
有機栽培ほ場の土壌実態調査(その2) ～土壌の理化学性について～	… 2	冬春期作型における良日持ち性ダリア エターニティシリーズの切り花特性	… 5
ハウスミカンにおける炭酸ガス施用技術の検討	… 3	‘コシヒカリ’における 被覆崩壊性を改良した緩効性肥料の施用効果	… 6

トマトホモプシス茎枯病の発病特性

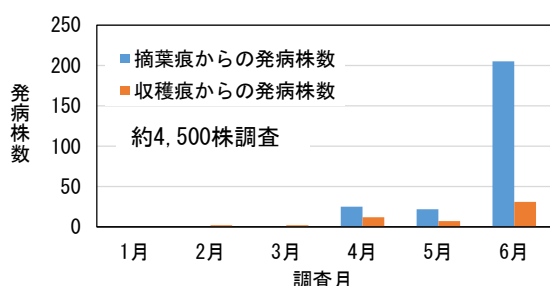


図1 発病株数の推移(2021)

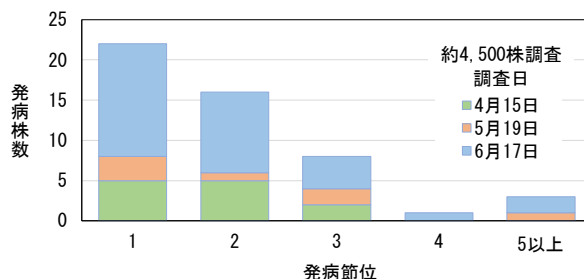


図2 収穫痕からの発病(2021)

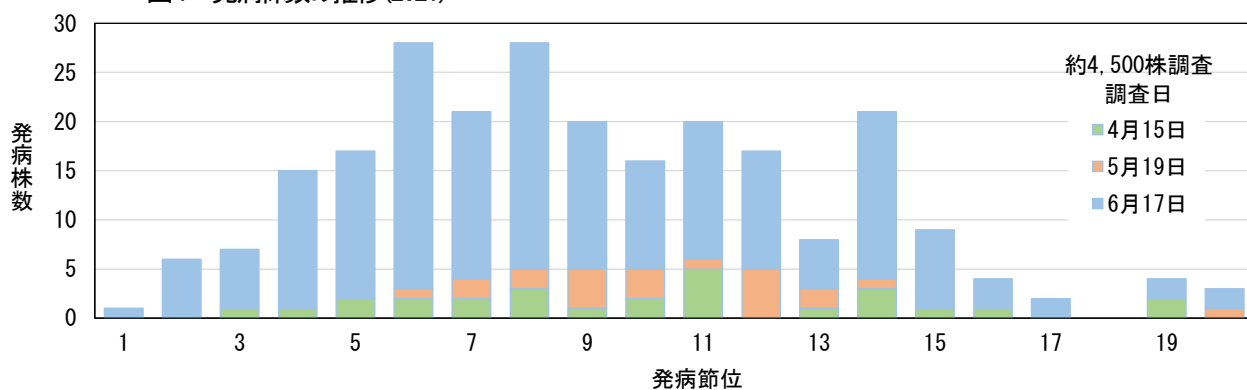


図3 摘葉痕からの発病(2021)

トマトホモプシス茎枯病(病原菌: *Phomopsis* sp.) は、茎に発生する病害で、症状が進行すると株全体がしおれ、後に枯死します。本病は、2017年に県内の施設栽培トマトで初めて確認された病害で、詳しい発生生態や防除方法は不明です。そこで、現地ほ場での本病の発病状況を調査しました。

本病の発生は、2月以降に確認され、栽培後期の4～6月に増加しました(図1)。本病は、主に果実収穫痕や摘葉痕から発病し、果実収穫痕での発病は1番果収穫痕で最も多く

(図2)、摘葉痕での発病は4～14葉摘葉痕で多くなりました(図3)。発病の多かった部位は、主に8～10月に収穫や摘葉が行われていました。これらの結果から、本病は、主に栽培初期の収穫や摘葉によってできた傷口から感染していると考えられます。

今後は、有効薬剤の探索を行い、効果的な防除体系の確立に取り組んでいきます。

(病理担当 山崎淳紀*、森實祐香

088-863-4915)

*現 環境農業推進課